

卷、梁沈璇撰見隋書唐書其書蓋集諸家注也、今無傳本爾雅釋丘望厓洒而高岸郭注唯云厓水邊酒謂深也此所引蓋釋丘舊注也王引之曰洒峭語之轉耳、嶧風新臺有洒毛傳曰洒高峻也、峻亦峭也、郭蓋以洒字從水故訓爲水深不達六書假借之義也、新臺有洒之洒豈亦得訓爲水深乎按說文、

厓山邊也

岸キシ

倭名鈔

に水邊曰涯、涯隙而高曰岸

と見えたり、涯はミナギハといふ者にして、

岸は即キシなりまた渚をナギサともいふは波の限れる所なれば舊事紀には波瀉の字用ひられしがども古事記には波限の字を用ひたりけるなり古記にキと云ひしは限の義ありしかば、ミナギハともキシともナギサとも云ひしと見えたり岸をキシといひ際をキタといひ限をキ

義ありミナギハといふミは水なりナはノといふ詞の同じからぬは各別れし所のありしにや涯をミナギハといひには浦回磯回などいふ事の如く水涯の回れる貌をいひ岸をキシといひしは細石をサハレシなど云ひじシといふ言葉の如く石岸の峭しき貌をいひ渚をナギサといひしは荒磯といひシツといふ詞の如く沙渚の平かな貌を云ひしも知るべからず古語に云ひしも井にこれ轉語にてありしなり

八雲御抄

地儀

岸カは岸

かた

万かた山

きし

高き岸

をばあまそぎといふ

倭訓

前編

七

きし

岸をよめり水涯をいふ際石の義なるべし日本紀に研をよめり岸と義通

へりかたきし、きしね、きしのつかさなどよみ新撰字鏡に墟をきしもとよめり、江戸にてかしといふ町がしなど云、大坂にてはまといふなどいふ芝居物類稱呼

天地

河岸かし

江戸にてかしといふ本町河岸或ハ濱

大坂にてはまといふなどいふ芝居

京にて川ばたといふ

八雲御抄

五

名所

岸

すみよしのきし

攝

万松原

御幸所

おほえの同

後真選歌

雲井にみゆるい

たつたの大

みむろの同拾

みむろの同

やくづるらん

いはしろ紀万

江戸にてはまといふ芝居

萬葉集

一

歌

草枕客

去君跡

知麻世婆

岸之埴

布爾仁寶

播散麻思乎